

## 麻田剛立生誕二百五十年に當つて

後 藤 安 臣

文人画家として高名な、画聖田能村竹田五十年祭記年行事が盛大に行われ、一方では竹田門下生帆足杏雨没後百年記念展も開催されている時、杵築市では杵築藩の生んだ世界的な天文暦学の大科学者であり、また解剖医学の実証的な医者の「麻田剛立」ごうりゅう生誕二五〇年を迎えている。麻田剛立は偉大な科学者でありながら、県内では余り知られていないことは誠に残念である。

麻田剛立は、享保十九年（一七三四）二月六日杵築藩儒者綾部綱齊ケイサイの四男として生れた。幼時より神童の名高く、幼少の頃から天体の動きに興味をもち、家人に背負れながら夜空の星の名を尋ね、星の名を明確に記憶したという。また、七才の頃から、縁側に射し込む日陰をじっと見て、二時間を過ぎる毎に、柱へ爪で印をつけ、この印の時が六ツ時であると皆に説明した。さらに四季を通じて、太陽の南北に移動する状況を毎日観察しつつ、実測本位の科学的、実証的な研究態度が既にこの頃から芽生えていたのである。

長ずるに及び本格的に、天文暦学と医学に志し、自学独学で研究にとり組み、二十才の頃から天文観測を専門的に始めたという。天体観測を正確にするため、望遠鏡の硝子を自ら磨き、「剛立時計」を創作したことも、実証に基づく正確な測定を心掛けた研究態度がよくわかる。独創的な観測調査研究の成果として、宝暦四年（一七五四）九月一日、当時官曆にも記載されていない日食日時を、その前年に予告発表した時、世人は全く狂気の沙汰と一笑に付し省みようとしなかった。時に剛立三十

才であった。この日食の予告は三浦梅園にも通知したものと見え、当日は早朝から観測し、剛立が予告した時刻に正確に日食が始まったという。梅園が剛立の観測調査の正確さ深さに驚いたことは、梅園の「綾正菴（麻田剛立）に与えるの書」に明記してある。

麻田剛立は、天文暦学の大家であったのみならず、医学にもすぐれ、明和四年（一七六七）父綱齊と同じく藩主の侍医となり、十二人扶持を給せられた。翌々年明和六年主君松平親貞は、大坂城加番を命ぜられ、その年の七月江戸城を出発大阪城に入城した。その随員の中に綾部璋菴（正菴）の名がある。璋菴即ち麻田剛立の実名である。

当時大阪では、松尾芭蕉、近松門左衛門、井原西鶴など既になく、中井竹山、中井履軒兄弟の懷徳堂の儒学、井上正臣の含翠堂の経書講読等が盛んに行われていた。剛立と中井履軒とは殊に親交深く、互いに啓発し合うことが少くなかった。

明和六年十一月十六日に、大阪の北緯三四、六五七度の地点で、剛立は月食帯の観測をしている。引きつづき翌七年（一七七〇）五月一日には日食の観測をしている。剛立の門人西村太冲の手になる「麻田家実測」の著書によれば、明和八年（一七七二）九月十六日にも、日食の観測をしている。

当時剛立は、太陽の黒点の観測に打込んでいたが、藩医職の仕事に追われ、観測の研究に支障を来すことが多いので、三度致仕（免職）を願い出たが許されず、遂に意を決して安永元年（一七七二）に脱藩の挙に出た。中井竹山、履軒に身を寄せ、大阪東区本町四丁目和泉又四郎の別邸で生活の為の医業を開いた。彼はここで綾部璋菴を麻田剛立と改め、以後大阪の地で没年まで、天文、暦学の研究にとり組んだのである。氏名を改めたのは、麻田村が綾部家の祖先の住みついた地にあるので、脱藩後の事情を考えてのことであった。

右のことから、麻田剛立は杵築藩をはなれ大阪の地で、天文暦学、医学（解剖学）について研究業績を挙げたことから、分県内はもとより杵築藩の地元でも、剛立についての認識が乏しいことがうかがわれる。

現在、大阪の地では観光協会発行の「大阪の人と史跡」の中に次のように記してある。

麻田剛立（一七三四—一七九七）は、豊後国杵築藩の儒者、綾部綱斉の第四子通称正菴（瑋菴）剛立は字である。彼はドイツの天文学者ケプラーの第三法則即ち「遊星周期の二乗は、太陽からの平均距離の三乗に比例する」との画期的な発表より一歩先んじて、研究結果を発表している。この独創的な大法則の発見は、鎖国の時代でなければ、剛立の第三法則として世界に名をとどろかせたことを思うとき、剛立こそ偉大なる大科学者と云える。

更に昭和五十三年十月、大阪市教育委員会文化振興課発行の「大阪市文化財」によると、麻田剛立は、杵築藩の医官で、明和八年（一七七七）来阪し、医学の分野で大いなる業績をのこし、寛政十一年（一七九六）六十六才で没した。ここでも剛立のケプラーの第三法則は、ニュートンの万有引力発見の基礎となったことを付記し、説明を加えてある。

麻田剛立は大阪の地で天文暦学、医学の部門で高名をはせ、宗因、契沖なきあと剛立を頂点として、文人、学者が輩出している。剛立の高弟としては、高橋左衛門（至時、東岡）間五郎兵衛（重富、大豪）などが有名である。伊能忠敬は東岡の高弟で剛立の孫弟子と云える。

剛立派の実測と学理による研究は、大阪の地より全国に広まり、篤学の士としての声価を得た。しかし、彼は諸侯から招かれても仕官を断り、幕府官暦改正に当っても招かれたが病といつわって断り、高弟の高橋東岡、間大業を推せんしている。また、剛立は天文暦学研究とともに医学（解剖学）研究では動物の解体研究、内臓の観察にとり組み、観察経過について三浦梅園とも意見を交換しており、天文、医学両面にわたり、麻田流といわれる一家をなしていた。しかし、剛立も研究生活に無理をした為、晩年は病がちとなり、寛政十一年（一七九九）五月十二日六十六才で没し、墓地は大阪天王寺町の浄春寺に葬られた。浄春寺は千日前デパート向の側に在り、万葉集の撰者藤原家隆の隠棲の庵室のあった寺と伝える。門前左隅に麻田剛立の墓所の碑があり、扉を開いて入ると、左手に堂々たる石碑があたりを圧する如く建っている。

これには「画聖田能村竹田」と彫られている。ここから更に奥に踏み入れると、麻田剛立の墓と剛立のゆかりの人により建立された顕彰碑が並んでいる。考えて見ると、竹田、剛立ともに藩に仕えていたが、両者とも理由は異なるが、藩を脱藩して大

阪の地で活躍し、同じ寺に碑が建立されていることも奇縁と云える。竹田に見出された杵築藩出身の天才画家高橋草坪も、この地で竹田に師事し、高弟となり竹田と同年病没している。故に、竹田百五十年祭と同じく草坪も百五十年忌に当る。

剛立生誕二百五十年にあたり、生誕二百五十年顕彰の音が関係者の間に起っている。大阪でも一部の人の計画の便りがあったが、郷土から離れていたことで、内々の行事に終ろうとしていることは、杵築藩関係者として誠に淋しい限りである。

(杵築市文化財調査委員長・XXXXXXXXXX)

### 大分県地方史料叢書(三)

## 豊前国村明細帳(一)

豊前国六六八ヶ村の村名、村高、領主名を記した豊前国高帳の他、宇佐郡下麻生村、宇佐村、元重組、田口組、下毛郡今津組、宮園村、中摩村の村明細帳など八編を収録。近世史研究必備の書。

(会員一八〇〇円、会員外二五〇〇円送料共)

発行所 大分県地方史研究会

### 大分県地方史料叢書(一)

## 豊後国村明細帳(九)

肥後領大分郡高田手永「高田風土記」ほか海部・国東・速見郡の村明細帳五篇収録。近世史研究必備の書。

(会員二五〇〇円、会員外三〇〇〇円送料共)

発行所 大分県地方史研究会